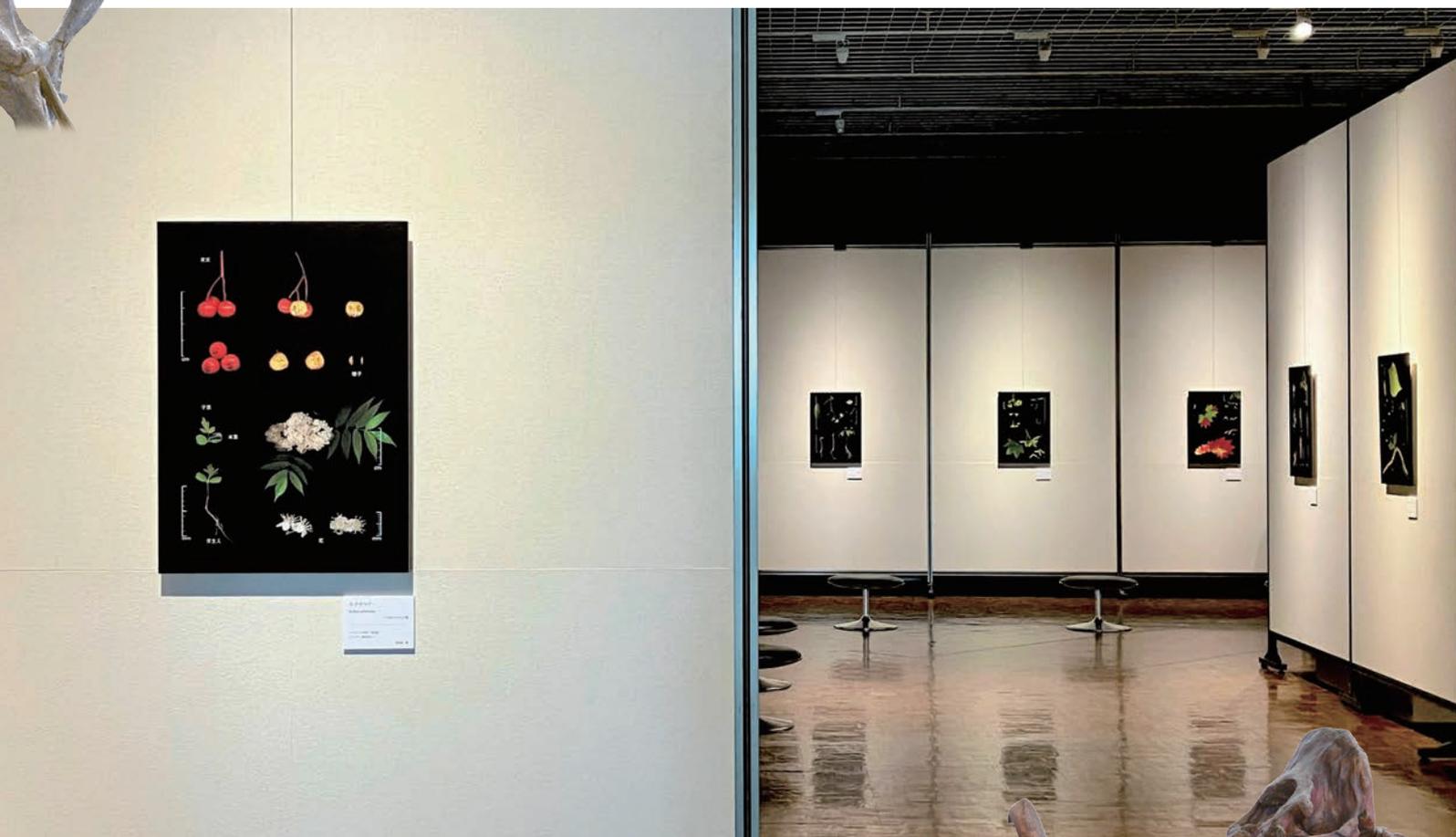


森のちやれんがニュース

2024夏

Newsletter vol.36



第22回企画テーマ展 「北海道樹木万華鏡 —スキャンアートと標本で見る木々のかたち—」開催

私たちの身のまわりには、たくさんの樹木があります。しかし、その細部を見つめる機会はありません。本展では、そんな樹木の「かたち」に注目し、さまざまな視点から北海道の木々の世界を紹介しました。

まず会場で皆様をお出迎えるのは、スキャナグラファーの孫田敏^{そんだとし}さんが制作した色鮮やかなスキャンアートの数々。植物を新鮮なうちにスキャンして作られた画像からは、植物のみずみずしさとともに科学的な造形美を感じます。

足を進めると、腊葉標本^{さくよう}や植物化石の標本が並びます。葉や花の配置や細

部の形は、見た目にも美しく、観察欲がかきたてられます。



(左) 腊葉標本、(右) 化石標本

皆様には、日々の喧^{けんそう}噪から離れ、じっくりと植物と向き合うひとときを過ごしていただけたと思います。

(研究職員 吉川佳見)



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
収蔵資料の活用から新種の植物化石を見い出さず！
—化石に見る収蔵資料の大切さ—
- ③ 総合展示資料紹介・第3テーマ
大漁 (大量) のニシンを肥料に加工する道具
- ④ 研究活動紹介
様々なモノを運ぶガンガン部隊
- 解説案内スタッフレポート
手から手へ
—博物館で技術を伝える—
- ⑥ トピックス
博物館の建物の改修工事を実施しました
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
当館のアイヌ語講座のご紹介
- ⑧ 活動ダイアリー
2024年3月～2024年5月の記録

収蔵資料紹介

収蔵資料の活用から新種の植物化石を見いだす！ —化石に見る収蔵資料の大切さ—

成田 敦史

研究部自然研究グループ 学芸主査

右の写真(図1)は植物の葉の化石であるとお分かりでしょうか?一部が欠けていますが、生きていた時には図2のような形の葉であったことが容易に想像できます。この化石は、筆者が2020年に新種として命名した化石です。

この化石は今から1,300万年前ころの新生代新第三紀中新世という時代のヤナギの一種で、*Salix palaeofutura* (サリックス・パラエオフトウラ)と言います(ちなみに現代のヤナギは河原付近を好む落葉広葉樹で、ある種のヤナギは幽霊に見間違えられますね)。この写真の標本は北海道北部の士別市で筆者によって採集されたものを当館に寄贈・収蔵した資料となります(収蔵番号187413)。

この化石は、現代の北海道には自生しないオオキツネヤナギ(*Salix futura*)によく似た特徴を持っていましたが、葉の縁のギザギザ(鋸歯)の形が鋭い針状であるなどの特徴から、新種として認定されました(Narita *et al.*, 2020)。この化石が新種として認定されるまでには次のような教訓的なエピソードがあります。

筆者が当館に着任したのは2022年度になりますが、それ以前は高等学校の理科教諭として、「植物化石の観察と古環境の推定」実験を高校生とともに毎年行っていました。そのため、実験・実習・研究用の資料として使用できるように、多くの植物化石を博物館と同じように個人的に採集・収蔵・管理していました。今回紹介したヤナギの化石もその中に含まれていましたが、筆者はこの化石をよく知られた別種の大タイプであると考えておりました。

ある日のこと、実習指導中にこの化石を観察していると、何か違和感を覚えました。そこで、化石の形を詳しく調べたところ、既知の化石種とは異なる



図1 *Salix palaeofutura*の化石
(収蔵番号: 187413)。
スケールバーは1cm。

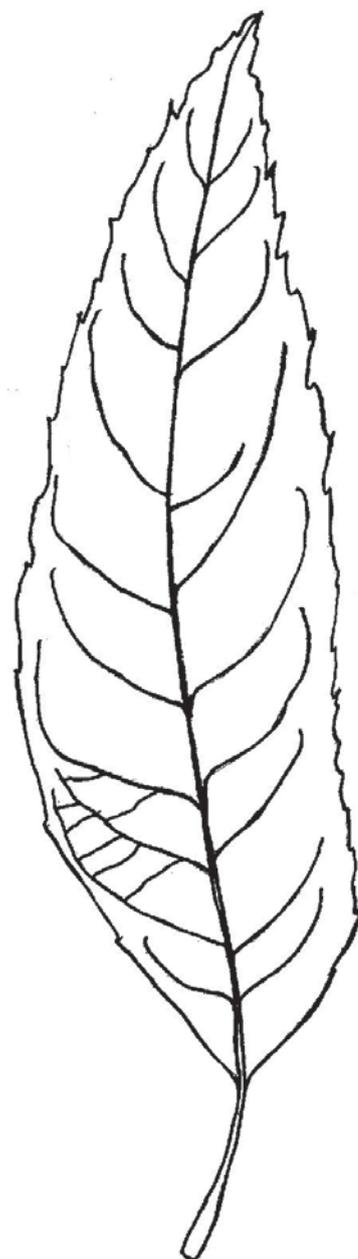


図2 図1の線画。欠けている部分は他の標本を基に復元して描いた。

特徴をもつことがわかりました。収蔵資料を教育現場で活用したことをきっかけにこの化石が新種であることに気がついたのです。

このように収蔵資料を観察・再検討する中で新種を見いだしたり、新発見につながったりしたケースには、むかわ竜(カムイサウルス)の例など、枚挙に暇がありません。博物館の収蔵資

料を適切に管理し、必要な時にすぐに再検討できる体制づくりや、常日頃から資料を観察すること、ちょっとした違和感を見逃さないことの大切さが実感できます。当館の収蔵資料にも新種が紛れているかもしれませんね。

※引用文献: Narita *et al.*, 2020. *Acta palaeobotanica*, 60, 259-295.

総合展示資料紹介・第3テーマ

大漁(大量)のニシンを肥料に加工する道具

会田 理人

研究部生活文化研究グループ 学芸主幹

総合展示第3テーマ「北海道らしさの秘密」の前半は、「自然の恵みとともに」と題して、北海道の代表的な産業の歩みを紹介しています。今回は、19世紀の終りから20世紀の初めごろ、北海道の漁獲高が年産70万トンから100万トンに達していた時代に、その漁獲高の約7割をも占めていたニシンを加工する道具と技術を紹介します。



春。4月の上旬から中旬にかけてが、ニシン漁の最盛期でした。大漁になると、手ぬぐいや酒、餅などが配られるなど、漁場は多いに賑わったといえます。

大量に漁獲されたニシンですが、食用としての身欠きニシンに加工されるのは、全体から見るとごくわずかでした。冷凍技術が確立していなかった時代、新鮮なニシンを遠方に流通させるのは難しいことでした。そのため、漁場では、鮮度のよいものを身欠きニシンに加工し、捕獲後に時間が経ってしまった大量のニシンを肥料に加工していたのです。

加工品のなかでも、「ニシン粕」が代表的な商品でした。「ニシン釜」と呼ばれる大きな鉄釜で煮たニシンを、「搾胴」という圧搾器に入れて蓋をし、上から下に向けて圧力を加えて水分・油分を搾り取ります。十分に圧搾したのち、圧搾器の中に残った身(=粕)を取り出して、干場で細かく砕いて乾燥させました。乾燥させた搾粕を、20~25貫(75~94kg)の俵装にして完成です。



ニシン釜は、高温で溶かした鉄を型に流し込んで製造しました(これを鑄造といいます)。口の大きさは約140cm(四寸六尺)、深さは70~80cmぐらいが標準的でした。

かつて、富山県高岡地方でこのニシ



ニシン粕を造るための道具 ニシン釜(左)と搾胴(右)

ン釜が盛んに製造されていました。この町のニシン釜を製造していた鑄造所の一つは、北海道や樺太に多数の取引先をもっており、主力商品である搾粕製造用の大型の鉄釜を多数販売していたことが、残された1920年代の帳簿からわかっています。

高岡鑄物工場の賑わい振りは、『高岡新報』1920(大正9)年4月14日夕刊第2面記事から垣間見ることができます。ここでは、北海道でイワシが豊漁で、イワシを原料とする搾粕製造用の鉄釜の需用が高くなり、製造に力を注いでいること、鑄物工場が建ち並ぶ千保川岸から鉄釜を舟で出荷して、河口に位置する伏木港へ搬送していること、同年の生産個数を約5,000個、一個あたりの売上金額を50円と仮定して、総額25万円の売上が見込まれることを報じています。

ニシン同様にイワシも搾粕に加工されていたこの時代、搾粕製造用の大型の鉄釜が高岡で大量に製造されていたことがわかります。

搾胴は、古いタイプは頑丈な木製で、

上口が広くて底が一回り小さい、逆台形状をしています。頑丈なのは、蓋をして上から長時間圧力を加える必要があったためで、上口が広い逆台形状をしていたのは、中の身(搾粕)を取り出すときに、搾胴ごと上下をひっくり返して取り出しやすくするためでした。



北海道のニシン漁業の発展、ニシン粕などの肥料の大量流通の背景には、北海道外における農業の発達や、それにもなうニシン粕需用の高まりがありました。

ニシンを原料とした肥料は、ニシン粕のほかに、胴ニシン、笹目(エラの部分)、白子などがありました。これらの肥料は全国へ出荷され、農家の肥料として利用されていきました。

徳島の藍、愛知や岡山、山口では綿花、和歌山や愛媛のミカンなど、商品作物の栽培用の肥料としてニシン粕が使われました。胴ニシンは富山など北陸地方に多く出荷され、米づくりに使われました。

研究活動紹介

様々なモノを運ぶガンガン部隊

尾曲 香織

研究部生活文化研究グループ 学芸主査



1987年生まれ、鹿児島県出身。2016年より北海道博物館にて学芸員として勤務。写真は浦幌町でガンガン部隊に関する聞き取り調査を行っているところ。

本当に新しい?デリバリーサービス

新型コロナウイルス感染症は、私たちの暮らしを大きく変化させました。そのひとつが、デリバリーサービス需要の拡大です。札幌でも会社のロゴが入ったリュックを背負い、自転車で配達する人や、出前専門店のバイクを見かける機会が増えました。また、各種通販サイトを利用して商品を購入し、自宅まで届けてもらうというサービスも、もはやインフラといってよいほど暮らしに浸透しているのではないのでしょうか？

スピード感は様々ですが、そもそも

商品を家に届けてもらうという行為自体はそれほど新しいものではありません。各地で聞き取り調査を行っているところ、今のデリバリーサービスとはちょっと異なりますが、かつて家には様々な商品を持って訪れる人が多数いたことがわかります。例えば配置薬の確認に来る販売員（売薬さん）。来た時にもらえる紙風船が楽しみだった、という方もいらっしゃるかもしれません。布団や宝石を売りに来た人がいた、という話も聞きます。このように家に物を売りに来る人たちの中でも、私が研究対象としているのは特に「ガンガン部隊」と呼ばれた人たちです。

ガンガン部隊はどんな人？

ガンガン部隊は、特に戦後から昭和の終わりごろにかけて、主に魚を売り歩いた行商人を指します。名前の由来は、その多くが、金属製の缶に荷物を入れて運んでいたため、という説がありますがはっきりしたことはわかりません。同じころ、本州以南でも「カンカン部隊」と呼ばれる、魚を売り歩いた行商人がいたそうです（山本志乃 2015『行商列車〈カンカン部隊〉を追いかけて』）。

私がこの人たちの存在を初めて知ったのは、2018年頃のことです。新十津川町在住の女性から、「戦時中に小樽から鉄道を利用し、新十津川まで魚をもってきて米と交換した“ガンガン部隊”の女性がいた」、というお話をうかがったのが始まりです。その後、江別市野幌や倶知安町でも、鉄道を利用して小樽方面から個人で魚を運び、それを売ったり米と交換しに来た女性がいたという話を度々耳にしました。ただしその女性の呼び方は「ガンガン部隊」でも「(氏名)さん」でもなく「小樽のおばさん／ばあちゃん」「塩谷のばあちゃん」でした。「ガンガン部隊」という言葉はおおよそ行商する人の総称で（缶を使っていなくてもガンガン部隊と呼ぶ例もある）、個別具体の人たちを指す際はどうやら「地名+年齢や性別といった属性」で呼んでいたようです。

彼女たちは戦後しばらくも魚を小樽方面から運び、倶知安町内で売りさばいた後、野菜を買って帰っていったそうです。また、「カツギ屋」と呼ばれる人たちもおり、この人たちは戦後の物資不足の頃にヤミ物資を運んだといわれています。ただし、ヤミ物資以外を行商する人も『カツギ屋』と呼ぶ場合もあり、両者の違いは明確ではありませんが、とにかく地域において小規模な流通を担う人々について掘り下げてみよう、と、出かけた先では必ずガンガン部隊や行商人について聞くようになりました。



小樽中央市場にあるガンガン部隊の展示



昭和40年代の虎杖浜駅（白老町）の様子。ガンガンと御用かごで荷物を運ぶ女性が列をなしている。（仙台藩白老元陣屋資料館蔵）

行商人の思い出をたどって

2023年からは、浦幌町立博物館の持田誠学芸員の協力を得て、浦幌町内でガンガン部隊および行商人に関する聞き取り調査を開始しました。ただし、現役の行商人がいなくなって久しいため、行商人本人やその人から魚などを購入していた人への聞き取りは難しく、現在は主にその子ども世代を対象としています。

ここまでの調査で、複数の地区にガンガン部隊や様々な行商人がいたことが確認できました。吉野地区では、昭和36（1961）年頃に「ガンガン部隊の母さん」一人が来て、駅を出て広場のようになっていところ運んできた荷物を広げ、魚などを売っていたそうです。

一方、ほかの複数の地区では、魚の行商人はこれまでの結果とは異なり「男性だった」「おじいさんだった」と

いう例が聞かれました。また最も意外だったのは、町内でガンガン部隊あるいは行商人たちが売り歩いていた魚は、浦幌町内にある厚内漁港ではなく、釧路方面で水揚げされた魚だった、という話です。厚内地区在住で魚の行商をされていた方も、朝早く鉄道で釧路まで行き、魚を仕入れて浦幌町内まで運び、売り歩いていたそうです。

魚も、生魚ばかりでなくぬか漬けやみりん干し、かまぼこなどの加工品があったそうです。吉野地区の状況を教えてくださいました男性いわく、昭和30年代半ばくらいまで、魚は日常的に食べるものではなく、主にガンガン部隊の母さんが来た日の夕飯に出ていたそうです。彼女が魚を売りに来た日の夕方には、駅近くの鉄道官舎の家々で夕飯用に魚を焼くため、においが辺り一面に漂っていた、という話もあり、魚の並ぶ食卓がちょっとした非日常だったことがうかがえます。

行商人が運んだもの

ガンガン部隊も含む行商人たちは、それぞれいつも扱っている物以外にも、頼まればよそから様々な商品を持ってきてくれたそうです。

また物ばかりでなく、倶知安町では、「小樽のおばさん」から結婚相手を紹介してもらった人がいる、という話もありました。単に物を運んで売るだけではなく、買い手と何か／誰かをつなぐ、そんな役割も“ガンガン部隊”は担っていたのかもしれない。

この夏の特別展「みんなの鉄道ーがんばれ！地域の公共交通」（7月20日～9月23日）では、鉄道の歴史とともにガンガン部隊も含めた、鉄道にかかわる“人”も紹介します。ぜひご覧ください。

解説案内スタッフレポート

手から手へ ―博物館で技術を伝える―

浅井 雅世

学芸部道民サービスグループ 解説員

今から32年前、ハローワークで「博物館解説業務」という求人に応募し、幸運にも採用された私は、勤務開始から3日後、なぜか稲わらで「縄をなう」練習に励んでいました。なんと体験学習室で「わら細工」を実演・指導するのも、重要な業務の一つだったのです。もともと不器用な私は、先輩たちの根気強い指導の下で、何とか縄をなえるようになり、さらに悪戦苦闘を繰り返しつつ、とうとう一足の「ぞうり」を

完成させることができました。その時の苦労と感動は今も忘れられません。そして長い年月が過ぎ、定年退職まであと数年となった今、今度は私が新人スタッフにわら細工を教える立場となりました。縄ないから履物、しめ縄づくりまで、これまで習得した技術を丁寧に伝えたいという思いに、新人さんたちも熱心に応じてくれて、頼もしい限りです。

博物館には多くの貴重な資料が展

示・收藏されていますが、その背景には、人の手による技術が潜んでいます。資料を後世に残すとともに、そこに関わる技術を伝えていくことも博物館の大切な使命です。博物館の職員、とりわけ体験学習に関わる一員として、先輩の手から受け継いだ技術を後輩の手へしっかりと受け渡したい。そんな思いを抱きながら、縄をなう手にも思わず力が入るこの頃です。



縄をなう…コツをつかむまでが大変です



ぞうり作り…縄に稲わらを編みこんでいきます



各サイズのぞうりが出来上がりました

トピックス

博物館の建物の改修工事を実施しました

鈴木 明世

総務部企画グループ 研究職員

北海道博物館の建物は、2020年12月に築50年を迎えました。この建物をこれからも長く使い続けるために、2023年度には、北海道建設部の発注で「長寿命化工事」が実施されました(設計:株式会社札幌日総建、施工:伊藤組土建株式会社、工事監理:株式会社日建社)。

この改修工事における主な改修内容は、外壁の外側にある回廊の補修、屋

上の防水補修、屋根の軒部分の塗装、資料を運ぶ大型のエレベーターの改修、そして、正面広場の床の石の交換などでした。

「森のちゃれんがニュース」2022年夏号や当館ウェブサイトの「建築」ページでも紹介しているように、当館は、建物それ自体が魅力的なものとなっています。そうした美しい見た目が損なわれないように、工事の関係者が実施する週1回の定例打ち合わせには、当館の学芸員も参加し、細かい改修方法や、塗装の色などをひとつひとつ検討して進めていきました。工事現場の確認などで、職人さんの作業を間近で見た時の、その手際の良さは今でも印象に残っています。

改修工事の期間中は、通行できる場所に制限を設けるなど、来館されたみなさまにはご不便をおかけしました



軒まわりの塗装状況 工事前(上)/工事後(下)



足場に覆われた博物館(奥)と正面広場の補修の様子(手前)

が、ご協力いただきありがとうございます。正面広場の改修を経て、入口までの足もとの不安は大大分おさまったと思います。工事の前で見た目が大きく変わってはいないので、変化に気がつきにくいかもしれませんが、より安全に楽しめるようになった当館へ、ぜひ足を運んでください。

アイヌ民族文化研究センターだより

当館のアイヌ語講座のご紹介

これまで当館ではさまざまな形でアイヌ語の講座を開催してきました。2023年度は初めての試みとして、オンラインの講座を開講し、参加者の皆さんとアイヌ語の物語を読み進めました。2024年度は、5月から7月にかけて、連続講座「アイヌ語講座～きほんのキ～」(全4回)を実施し、10月は、「オンラインで楽しむアイヌ語」と題したZoom開催の講座を企画しています。

基本のキから学ぼう

「アイヌ語講座～きほんのキ～」では、まず初回でアイヌ語の発音や表記について学び、2回目以降は「アイヌ語ブロック」を使いながらアイヌ語の基本的な文法を学びます。



写真1 アイヌ語ブロック

「アイヌ語ブロック」(写真1)は、色の異なる4つのブロックを組み合わせて、遊びながらアイヌ語が学べる、当館オリジナルのツールです。このブロックは総合展示室に設置されており、どなたでもお手にとって楽しんでいただけます。講座では、参加者の皆さんがひとりずつさわられるように、小さいサイズのブロックを用意してお配りしました。

当館HPの「おうちミュージアム」(<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/ouchi-museum/>)では、アイヌ語ブロックのペーパークラフトのデータを公開していますので、興味のある方はダウンロードして遊んでみてくださいね。

今年の秋はオンライン2本立て!

10月開催の講座「オンラインで楽しむアイヌ語」は、初級編と中級編に分かれています。片方だけの参加も両方の参加も歓迎です。

初級編では、インターネット上で公開されているアイヌ語の音声資料には、どんなものがあるのかを紹介し、たとえば当館HPの「ほっかいどうアイヌ語アーカイブ」(写真2)では、当館収蔵のアイヌ語資料のあらましを公開していますが、その一部についてはオンラインで音声を聴くことができます。講座では、他機関が公開している同様のページも見ながら、それぞれの便利な検索機能についても説明します。「アイヌ語ってどんな言葉なのか、音だけでも聞いてみたい」、「アイヌ語アーカイブのことはよく知らないから、話だけでも聞いてみたい」という方におすすめです。

中級編では、音声資料をアイヌ語学

(アイヌ民族文化研究センター 研究職員 吉川佳見)

習に活用する方法を紹介します。「市販のテキストでアイヌ語を勉強しているけど、他にも勉強に使えるものがほしい」という方にもおすすめです。

お申し込み方法などの詳細は、決まり次第、当館「行事あない」やHPでご案内します。ご参加お待ちしております!

* * *

<講座日程>

「アイヌ語講座～きほんのキ～」(連続講座)【申込終了】

日時:2024(令和6)年5月12日(日)、6月2日(日)、6月30日(日)、7月14日(日)、各回13:30~15:30

会場:北海道博物館 講堂

「オンラインで楽しむアイヌ語」

<初級編>【9/6(金)~申込受付予定】

日時:2024(令和6)年10月5日(土)

<中級編>【9/20(金)~申込受付予定】

日時:2024(令和6)年10月19日(土)

いずれも13:30~15:30、Zoom開催

北海道アイヌ語アーカイブ 資料検索の結果

検索した条件にあてはまる資料は次の通りです。
資料のタイトルまたは番号をクリックするとその資料の情報を表示します。

全935件のうち、1件目から20件目を表示

資料番号	資料タイトル
CC800001	平取町の伝承 4
CC800002	私の歩み:黒川セツ 1(その1)
CC800003	私の歩み:黒川セツ 1(その2)
CC800004	厚別川流域のアイヌ歌謡
CC800005	厚別川流域の語文物語
CC800006	平取町の伝承 1
CC800007	平取町の伝承 2
CC800008	平取町の伝承 3
CC800009	旭川に伝わるアイヌ文化 1(その1)
CC800010	旭川に伝わるアイヌ文化 1(その2)
CC800011	旭川に伝わるアイヌ文化 2

現在の検索条件

タイトル [] 部分一致 []
 地域 [] 部分一致 []
 人名 [] 部分一致 []
 キーワード [] 部分一致 []
 年代 [] 年から [] 年まで

追加検索条件

キーワード [] 部分一致 []
 キーワード [] 部分一致 []

再検索

写真2 ほっかいどうアイヌ語アーカイブ
(当館ウェブサイトの「アイヌ文化を学びたい方へ」のページからアクセスできます。)

活動ダイアリー
2024年3月～2024年5月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

- 3月2日(土)
 ■自然観察会「動物の足あとを探そう」を開催。
 担当：堀繁久・水島未記・表深太、自然ふれあい交流館スタッフ。
- 3月2日(土)
 ■連続講座「はじめての古文書講座⑧」を開催。
 担当：三浦泰之。
- 3月6日(水)
 ■館内定例研究報告会を開催。発表者：池田貴夫。
- 3月10日(日)
 ■特別イベント「クマゲラー斉調査2024」を開催。主催：野幌森林公園を守る会、共催：北海道博物館。担当：水島未記。
- 3月16日(土)
 ■連続講座「アイヌ語講座オンライン『アイヌ語の物語を読む⑥』」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。[写真1]
- 3月17日(日)
 ■子どもワークショップ「ヒツジの毛にふれてみよう② フェルトの雪だるまストラップ」を開催。担当：会田理人。
- 3月28日(木)
 ■北海道博物館研究紀要第9号、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要第9号、北海道博物館資料目録第3号 全国樺太連盟資料1を刊行。* PDFデータを当館ウェブサイトで公開。
- 4月6日(土)
 ■自然観察会「エゾアカガエルのラブコールを聴こう」を開催。担当：水島未記・表深太・堀繁久、自然ふれあい交流館スタッフ。
- 4月6日(土)
 ■はっけんイベント「野鳥モビールを作ろう」を開催(4・5月の土・日・祝・振)。[写真2]
- 4月7日(日)
 ■第21回企画テーマ展「森のちゃれんが宝箱 一スタッフ押しのお蔵資料や博物館活動を紹介する展覧会、いや、展覧会!?」閉会。
- 4月12日(金)
 ■総合展示室 クローズアップ展示①～⑦を展示入替(①・②は6月13日(木)、その他は8月8日(木)まで)。
 ①「地質の日」関連展示 恐竜絶滅の痕跡ー北海道浦幌町の白亜紀(K)/古第三紀(Pg)境界層の剥ぎ取り標本ー
 ②ヨイチ場所請負人 林家文書の世界①
 ③ヨイチ場所請負人 林家文書の世界②
 ④新しく仲間入りしたアイヌ民族に関する資料たち
 ⑤文字に記されたアイヌ語ーアイヌ自身によるアイヌ語の表記(1)ー
 ⑥岩手県から北海道へ渡った神楽
 ⑦たくぎん(北海道拓殖銀行)
 ⑧<歩く宝石>北海道のオサムシ

- 総合展示室 小規模展示「探してみよう! 地域のお宝ー高齢者と協働する地域学習プログラムの開発ー」を開催(8月8日(木)まで)。[写真3]
- 4月20日(土)
 ■連続講座「ちゃれんが古文書クラブ①」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
- 4月21日(日)
 ■特別イベント「博物館のウラ側を見てみようー地学編(同日2回開催)ー」を開催。担当：圓谷昂史・博物館研究グループ。[写真4]
- 4月27日(土)
 ■第22回企画テーマ展「北海道樹木万華鏡ースキャンアートと標本で見る木々のかたちー」を開催(6月23日(日)まで)。
- 4月29日(月・祝)、5月3日(金・祝)～6日(月・祝)
 ■屋上スカイビュー特別開放[写真5]
- 5月11日(土)
 ■連続講座「ちゃれんが古文書クラブ②」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。
- 5月12日(日)
 ■連続講座「アイヌ語講座～きほんのキ①」を開催。担当：吉川佳見。
- 5月18日(土)
 ■自然観察会「樹木的美しさをじっくり見よう」を開催。担当：堀繁久・水島未記・表深太・成田敦史、自然ふれあい交流館スタッフ。[写真6]
- 5月29日(水)
 ■館内定例研究報告会を開催。発表者：各研究代表者。



写真3



写真4

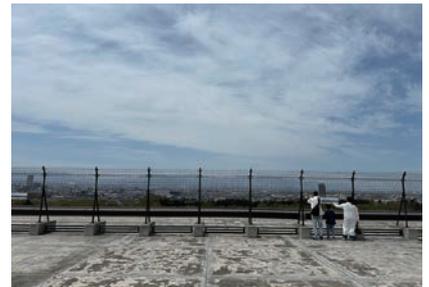


写真5



写真1



写真2



写真6

人事異動

〈 〉は前職

- 退職(3月31日付) 〈副館長〉曾根宏之、〈学芸部長〉池田貴夫、〈学芸部研究戦略グループ学芸員〉舟山直治
- 転出(3月31日付) 〈総務部総括グループ主査〉三井義也・鈴木芳彦、〈総務部総括グループ主事〉金子未来
- 新任(4月1日付) 学芸部道民サービスグループ兼研究部生活文化研究グループ学芸員：谷口生貴斗
- 転入(4月1日付) 副館長：須田光政、総務部総括グループ主査：丹羽章夫、総務部総括グループ主査：葛野俊介、総務部総括グループ主事：熊谷那月
- 内部異動(4月1日付) 学芸部長：三浦泰之、学芸部博物館基盤グループ兼研究部歴史研究グループ学芸主幹：鈴木琢也、学芸部道民サービスグループ兼研究部博物館研究グループ学芸主幹：青柳かつら、総務部企画グループ兼研究部自然研究グループ学芸主査：成田敦史、学芸部博物館基盤グループ兼研究部生活文化研究グループ学芸主査：尾曲香織、総務部企画グループ兼研究部自然研究グループ学芸員：久保見幸、学芸部道民サービスグループ兼アイヌ民族文化研究センターアイヌ文化研究グループ学芸員：丸丸由紀子、学芸部研究戦略グループ兼アイヌ民族文化研究センターアイヌ文化研究グループ研究職員：甲地利恵

来館者数

○2024年3月	総合展示室 4,782人	特別展示室 4,516人	はっけん広場 760人
○2023年度合計	総合展示室 103,936人	特別展示室 60,582(内 特別展43,473)人	はっけん広場 6,308人
○2024年4月～5月	総合展示室 9,563人	特別展示室 6,772人	はっけん広場 1,331人
○累計(2015年4月～2024年5月)	総合展示室 833,508人	特別展示室 581,837人	はっけん広場 127,521人

森のちゃれんがニュース 第36号

発行日：2024年6月27日
 編集・発行：北海道博物館
 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
 Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657
 ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>
 ©Hokkaido Museum, 2024